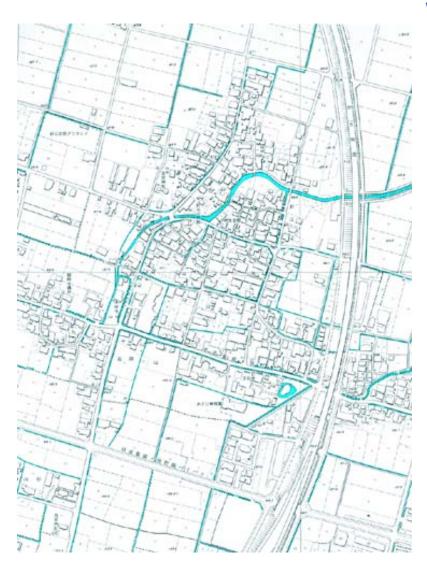
ミツカン 水の文化センター



working paper

整理番号 MWP2004-003

タイトル 事例:川端の生水

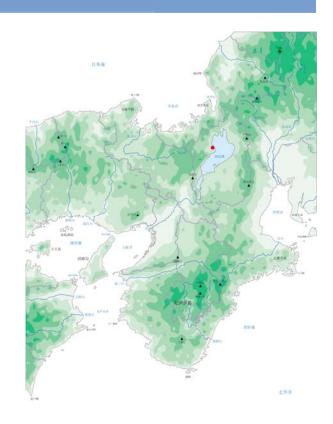
滋賀県高島郡新旭町針江区

キーワード 里川

取材日 2003年03月17日~18日 2004年02月08日

提出日 2004年07月20日

レポーター ミツカン水の文化センター編集部 賀川一枝/賀川督明





2003年の3月に開催された「京都国際水フォーラム」の取材時に、「世界こども水フォーラム」のメンバーと訪れた滋賀県新旭町針江地区で、現在も生きて使われる湧水を見て、大いに触発された。ここは「水と文化研究会」の嘉田由紀子さん、小坂育子さんが取り組んでおられるフィールドでもある。

今回フィールドワークに同行させていただき、たくさんの興味深い写真を撮ることができたことを、お二人に深く感謝申し上げたい。

湧水を屋形で覆って、室内に仕立てた場所を「かばた(川端)」とか「かわど(川戸、川処)」と呼ぶ。用水路を利用して野菜を洗う風景は日本全国多くの地域で見られるが、湧水を各戸が屋形で覆って私有するのは珍しい。

人間に限らず、動物が生きていくためには水が不可欠。水のある所に人間が居を構えるのは、自然の理である。人間の数が増え、自然に湧き出す泉のそば、という恵まれた条件の居住地が足りなくなると、人間は人工的に井戸を掘ることで水を得た。掘っても水が得られない不便をしのいで、遠くから水運びをすることで、命をつなぐということも珍しくない。こういう条件下では、水利権は当然厳しい衆人監視のもとにおかれた。

そう考えると「かばた」や「かわど」で湧水を私有できるということは、豊かな湧水が得られる地域独特の文化と見ることができる。しかし、その豊かさは逆に稲作にとって収穫量の落ちる悪条件で、「しるた(湿田)」と呼ばれるほどの水はけの悪さをも合わせ持ったものであった。

このように水とのつき合いにおいて、良い面と悪い面の双方とうまく折り合いをつけて暮らしてきた例を、新旭町の針江地区に見ていこう。針江という地名は、春になると葦 (アシ) が針の先のようにつんつんと伸びていく様を表現しているという。ちなみに、アシもヨシも同じもので、アシが悪しに通じることを嫌ってヨシ (良し) と言い換えているだけということである。

写真上は、NHKの放映で一躍有名になった田中三五郎さんの家のかばた。83歳の現役漁師の三五郎さんが、自分で捕ってきたフナで鮒寿司をつくるのも、このかばた。水が溜まった中心にある円柱を「坪池」と呼び、周りの「端池」よりきれいな水として区別して使う(「坪池」の水を汲んで口をすすぎ、すすいだ水は「端池」に流す、など)。

写真下は、三五郎さんのかばたを外から見たところ。鯉が飼われているのは、かばたに流された残飯を浄化するため。油ものを極力しない食生活なのか、と聞くと若い人は特にそういう気の使い方はしていないとのこと。しかも鯉はカレーなどの脂っこいものが大好きで、鍋を入れると喜んで寄ってくるという。当然のことながら、鯉は運動不足の栄養過多で肥満気味。昔は食べることもあったが、最近の鯉は食べてもおいしくないので、こうして飼っているだけだということである。

水温は地域によって差もあるが、年間を通して13〜15度で安定 している。











三五郎さんのかばたは、引き戸で台所と仕切られている。昔の台所には、タイルで貼った立派な「おくどさん」(竈)が残っているが、今は使われていないので上に蓋をしてガス釜などが置かれていた。「おくどさん」のもっと右側に新しいシステムキッチンがあって、ガスコンロも今はそちらを使っている。

木の落とし蓋がたくさん重ねられているのは、 漬物をたくさん作っていたということか。台に使 われているのは、ミツカンの古い木製の通い箱 だ。

「おくどさん」の壁には、台所の神様の貼り札が何枚も貼られ、火への畏敬の念が見てとれる。

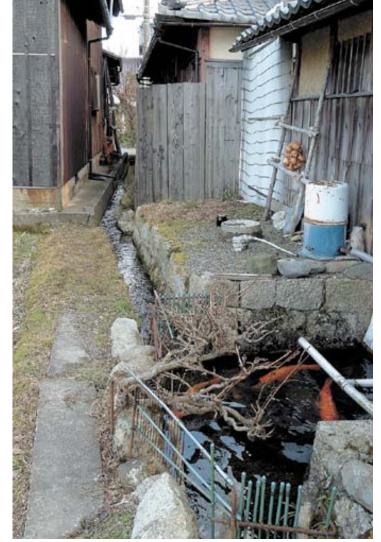
三五郎さんの奥さんのちか乃さんは、撮影用に鯉を誘き寄せるため、固形のフードを撒いてくれた。年寄り夫婦の残飯では鯉が満腹にならない、という心遣いから、いつも用意しているのだろう。

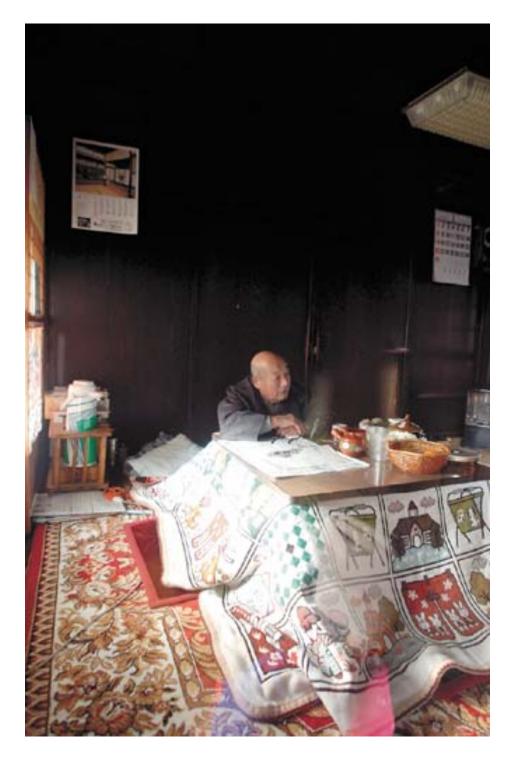




かばたから出た水は水路に流れていくが、水路への境には棒を立てて鯉が勝手に出ていかないようになっている。水路は山のほうから来て、下に流れている。家々の間の細い水路は、各々合流して広い水路となって川へと流れ込んでいく。













2月になると、害虫を退治するために枯れたヨシ原に火を放つ「ヨシ焼き」が行われる。「ヨシ焼き」は年中行事で、焼け跡の灰はそこの肥料にもなる。

3月に入るとその焼け跡に雪解け水が流れ込み、水 辺へと変身する。ヨシの新芽も、ぐんぐんと成長する。 この時期には琵琶湖の深い場所に棲む鯉がヨシ原に 来て産卵するので、それを狙っての漁が行われる。

産卵期の鯉は、暴れ回るような勢いがある。水草の間を雌の鯉がせわしなく泳ぎ回るのは、雄の体力を試すため、といわれている。さんざん泳ぎ回ったあとに、雌は水草に卵を産みつけ、体力のある強い雄だけが雌の産卵に立ち会い子孫を残すことができるのである。この恋のバトルが「のっこみ」と呼ばれているため、この時期の漁は「のっこみ漁」といわれる。

漁の獲物は、鯉以外にも鮒やナマズがいる。40年以上漁師をやってきた三五郎さんは、いつ、どこに、どんな獲物がやってくるか、経験から予測することができる。水温の違いや、ちょっとした条件の変化で魚は動きを変えるので、それを予測するのが漁の成否を左右するということだ。三五郎さんは1周するのに2時間ほどかけながら、囮り網の「モンドリ」を仕掛けていく。昔は「おかず漁」といって、自宅で食べる分の魚を捕る漁が広く行われていたが、今では漁をする人も三五郎さんだけになってしまったそうだ。

82歳を過ぎて足も悪くなったため、畑仕事もやめてしまったという三五郎さんだが、NHKのテレビ取材でひっぱりだこ。この日も朝早くから撮影だった、と少しお疲れ気味。それでも吃水の浅い木船を竹棹1本で操る様子は、しっかりしたものである。

鯉ののっこみ漁が終わると、4月中旬には鮒ののっこみが始まる。腹に子を持った鮒は、鮒寿司の材料として欠かせないご馳走だ。鮒は鮒で習性があるので、鯉とは違った経験と感が要求される。

三五郎さんが掌に乗せているのは、ブルーギル。誰かが琵琶湖かヨシ原に放ったものだろうが、在来種の生態系を壊す恐れのある外来魚である。生物多様性とはいうものの、在来種の生態系を守らなければ、絶滅する恐れのある種も出てくることが懸念される。「水を守る」視点は、水質だけにとらわれず、生態系にも目を向けていきたいものである。







三五郎さんの厠は、別棟になっている。三五郎 さんも腰が悪くなって、昨年からは肥料として利 用しなくなったそうだが、それまでは自然サイク ルの一環として立派に機能していた。

この厠にはいわれがあって、マキノ町の大工さんが使っていたものを今津町の料理屋を経て、ここにやってきたという。三五郎さんは「粋な厠」と表現したが、どうやら代々引き継がれることは厠にとってももらう側にとっても名誉で縁起が良いことらしい。柱や壁に檜や栗材が使われ、屋根瓦も軒の先端が丸くなった唐草瓦が使われた上等品だという。

農作業の途中でトイレに入ることは、女性にとって面倒なことだったらしい。初めて知ったことだが、実は小便器は男性用だけでなく、女性用もあるのだ。着物も汚れているから、いちいち脱ぐのが面倒で、裾をはしょって便器に向かって後ろ向きに立ち、少し腰をかがめて用を足すと、三五郎さん。

この女性用小便器の形を見て、まさに朝顔であると納得したのである。





透明性のある波板で覆っているために、外から見たときに内部が見えてしまう「かばた」。プライバシーうんぬんをうるさく言わないおおらかさが感じられる。

室内を見せていただくと、漬物の樽などが置かれていた。ここの「かばた」にはポンプが見られたので、汲み上げた地下水も併用しているようである。

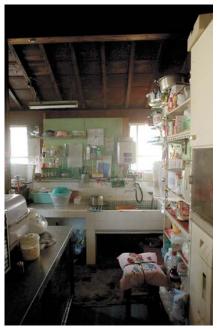
芽を出したばかりのネコヤナギや根菜類、漬物樽など、賑やかな「かばた」。 やはり昼間の外光をうまく使えるように、壁には透明な素材が使われている。

こんこんと湧き出る湧水のそばには、近所の 人からのおすそ分けというワカサギがザルに入 れられていた。ワカサギも外来魚。琵琶湖で繁 殖中らしい。









「かばた」は水場のみが単独である場合と、台所と隣接する場合があるが、このお宅では完全に一体化していた。母家とは別棟として広く普請された台所には、立派な「おくどさん」とタイルで貼った流しがあり、大勢の食をつかさどっていた往年の貫禄を思わせる。近代式のコンロも後から設置されているが、主婦の脚が不自由になったため、どうも現在はあまり使われていないようだ。

整理していないことを気にしていらしたが、なかなか立派な「かばた」を見せていただき勉強になった。

「かばた」は階段式になっていて、壁の一部には引き戸のついた物入れがはめ込まれていた。 屋外の水槽には、丸々太った鯉が泳いでいた。









漁師さんのプロの「かばた」。広いガレージには網が乾してあった。外の水槽は生け簀として使われているためか、普通の家より広め。トンビや鳥から魚を守るため水面に網を張り、植木のプランターボックスが載っていた。室内を見ると、この家でもポンプがあり、湧水と汲み上げた地下水が併用されている模様。

母家から離れた外の「かばた」に屋根をつけ、 壁で囲った例。多分、農作業などの外仕事で使 うことが多いため、このようなスタイルになったの だろう。水槽の上に板を渡し、使いやすいように 棚も工夫して設けられている。不要になった洗面 台の下部が、物入れとして再利用されているの も、面白い工夫。











針江では屋形で覆った「かばた」だけではなく、 屋外の水槽もよく目にした。ここに鯉を飼ってい る人もいれば、自由に水を飲めるようにコップを 置いている人もいて、使い方も人それぞれ。

新築の家の脇に作られた水槽。実は火事になって家を建て替えた際、隠居した父親がどうしても「かばた」を失いたくないと主張したため、屋外に作ったものだという。「こんな無味乾燥なコンクリート製のかばたじゃあ、嘉田先生に叱られる」と冗談めかして言っていたが、暮らしのスタイルが変わるにつれて失われる恐れのある「水の文化」が、こういう風に姿を変えても継続されていくことが、生き残りの可能性の一つと評価できる。







多分、大変湿潤な土地柄だったゆえ、家は土台を高く上げて建てられたのだろう。家と家の間を走る水路は、土台からはるかに低い土地を抜けている。

今でこそ、水が豊富な地域としてよそからも羨ましがられているが、稲作が主体だったころは湿潤すぎる土地柄は悩みの種であった。輪中から始まった三重県桑名郡長島町のように、盛り土をした上に稲を植え、田舟で行き来しながら農作業をした時代もあったそうだ。

こうした湿潤な田んぼは「湿田(しるた)」と呼ばれ、年貢米を他より減免される処置も存在したほどだというから、収穫の歩留まりが悪かったに違いない。

水路に泳いでいる鯉は、誰かの「かばた」からはぐれてきた迷い子だろうか。昔は「かばた」を持たない人が水路で鯉を飼ったこともあったという。

鯉は、個人のかばたと水路の間を、自由に行き来している力のような気がしてしまうが、実際には柵で囲われて勝手に出ていかれないようになっているようだ。そう考えると、水路を泳いでいる鯉は、琵琶湖から上ってきたか、誰かが水路に放った鯉だとしか思えない。







家の前を流れるにしては幅の広い水路。板を渡して、路地を行き来するのに利用している。近隣のおじいさんの話では、これでも往時の半分ぐらいの幅になったということ。昔(いつごろの話かは、確認できなかった)は、この水路まで田舟でやって来て、収穫した稲束などを荷揚げした場所だという。「針江の公民館の前の大川には船着き場があって、30艘ぐらいの田舟をつけることができた」とも言っていた。水路の幅が狭まったのは、やはり自動車が増えたせい。運送の主役が田舟などの舟運から自動車に変わった影響が、ここにも表れている。

針江公民館前の大川に掛かる橋の上から、水面を見て。護岸がコンクリートで固められてしまっているが、水との距離を縮めようと、緩やかな階段で近づいていかれるようになっている。

自然の岸辺が好ましいことは比べようもないが、このように川に沿って家々が連なっていく景色というのは、人間の心象風景としてさまざまな思いを想起させる。それが日本人独特のことなのか、人間に本来備わったものなのかはわからないが、少なくとも私たち二人にとっては「くつろぎ」「なごみ」「豊かさ」「すがすがしさ」「懐かしさ」などの、ポジティブな印象を感じさせる風景である。





針江をはじめとする新旭町の川掃除は、人と 人の関わりを強める絆と言っても過言ではない。 川掃除は一家に一人の義務であるが、暑い盛り の川掃除は子供にとっても水遊びの一環として、 楽しい行事なのかもしれない。

川に入って藻を刈り取り、下流に流れた藻を岸に上げていく。岸から刈るときには、鎌を長い竹の先に結びつけて行う。藻取りハサミという、2本の竹をヒモでばってんに縛って、藻を挟んで引き抜くための道具を使うこともある。









下流には川に渡した板に金属棒を差し込んで柵をつくり、刈った藻が琵琶湖まで流れ込まないように気遣っている。暑い最中に水を含んだ重い藻を引き揚げるのは難儀な作業だというが、昔は貴重な肥料として使われていたというから、こんな所にも資源の循環のサイクルが機能していたのである。





近年問題になっているのは、農業用水路の掃除。川掃除は農業従事者だけでなくすべての家庭から参加するが、農業用水路の場合は農家のみ。これも一家から一人の供出だが、大規模農家が増えたことで農家の戸数が減り、参加する人数が減っているそうだ。必然的に一人ひとりの負担が増え、今後の維持管理に支障をきたす恐れもあるという。





琵琶湖湖畔の浜掃除は県の河港課からの委託事業。したがって作業の後にはジュースなどのご褒美が出たり、組単位の取り決めで配分している。









水への意識を高めるためには、派手なパフォーマンスもときには必要。最初は直径1.5mほどの水車が有志の寄付で取りつけられたそうだが、組の役員に大工さんが二人もなったことから、この大水車になった。湖北の高月町までつくりかたを習いに行って、手間賃はただでつくったそうだ。

昔は精米や粉挽きなどに使われた、実際に働く水車 だっただったのだ。大きくて目を引くため、誰もが近 寄ってしまうシンボル的存在だ。

水の汚れを敏感に感じとる、指標植物である梅花藻。 米原町の醒ヶ井から分けてもらってきたという。しかし 「昔の水路には、金魚藻が生えていた」というのは組 の役員さんたち(40代から50代の男性)の記憶だ。水 中に美しい梅のような花が咲くことから、この名前が ついている。

こうした藻は冬場でも、瑞々しい緑を保っている。逆 に夏は茂りすぎるため、川掃除で藻刈りをする。

こんなに水の豊かな地域でも、昔のように川に入って魚つかみをするのは、今では非日常になってしまっているようだ。それでも夏祭りには川との距離はグッと縮まり、お盆には田芋の葉に供物を包んで川に流した風習もあったというが、こうした風習も川を汚さないために10年ほど前からやらなくなってしまったそうだ。自然に還るものなら川に流してもいいのではないかとも思うが、人間の吐き出すものが、川や土壌が自然に還せるキャパシティを越えてしまったということかもしれない。

お盆や夏祭りには、郷里へ帰省する人もいて、針江もいつもより賑わう。針江では、若いうちは町で暮らし、結婚して、子供が生まれるころになるとUターンする人が多いといい、町会の役員さんたちの感想は「他の地域より多いんじゃないのかな」ということである。

車社会になって、買い物なども不便をあまり感じないで暮らせること、それ以上の親しみ、愛着を、生まれ育った地域に持っていることが原因ではないかと思った。

豊かな水を生かしながら暮らす、また、その水を守るための手間も時間もとられるが、それがマイナス要因ではなく、自分の郷里を愛するというプラス要因で働いていることがわかった。